

知識、教養、教育：歴史的考察と今後の展望

関西大学文学部教授 竹内 洋

○パチンコと岩波新書

私は、'02年に『教養主義の没落』（中公新書）を上梓した。幸いなことに、各新聞の読書欄でとりあげていただいた。毎日新聞（'03年8月17日）では、フランス文学者の鹿島茂氏に書評をしていただいたが、その出だしがおもしろかった。こんな具合である。

「今では信じられないかもしれないが70年代の前半まで神田の学生街のパチンコ屋で人気ナンバーワンの景品は岩波新書と岩波文庫と決まっていた。パチンコ屋通いの学生でもタマを岩波新書や文庫と交換して少しでも教養を高めようとしたのだ」

今となっては不思議なこの光景は、当時京都大学の大学院生だった私にも憶えがある。上京したときに、神田で目撃したからである。

○特権学生文化としての教養主義

パチンコと岩波新書あるいは文庫本の取り合わせが象徴するように、'70年代初めまでの大学には、キャンパスの規範（儀礼）文化としての教養主義があった。

教養主義とは古典の読書による、真善美の追求によって人格を向上させたり、社会を改良したいという志向・態度である。もともとは大正時代の旧制高校を主な舞台に、『三太郎の日記』（阿部次郎）や『善の研究』（西田幾多郎）など哲学や歴史、文学などの書物を読む旧制高校生達の文化だった。旧制高校は『伊豆の踊子』（川端康成）にでてくる第一高等学校生にみられるような戦前のエリート学校である。旧制中学校を卒業（修了）し、難関の入学試験に合格した者たちの学校だった。旧制高校卒業者のほとんどは帝国大学に進学した。日本の指導者や知識人の多くを生み出した。その意味で教養主義とは、そのはじまりからして限られた学歴エリート（同年代のせいぜい数%）達の特権的文化だった。

○大衆化する教養主義

旧制高校は'50年に廃校になったが、戦後は、駅弁大学（駅弁のあるところに必ず大学がある）といわれるように新制大学が雨後のたけのこのようにできた。'40年（戦前）、47校しかなかった大学は、'49年（戦後）には178校にもなった。その後も新設大学や新設学部によって大学数と大学生の数は膨張した。'70年には大学は、382校となった。'40年の同一年齢高等教育進学率（大学のほかに専門学校や高等師範学校などを含めて）は3%だったが、'50年、6%、'60年、10%、'70年、24%になる。新制大学の教養課程は、旧制高校に模されていたことによって、教養主義は、戦前よりはるかに多くの青年をとらえることになった。

大学生の読む雑誌は、社会人と大きくことなっていた。『中央公論』や『世界』などの総合雑誌であり、愛読書にはベストセラーも入ってはいたが、『若きウェルテルの悩み』や『罪と罰』『ジャン・クリストフ』などのような硬い本が上位に並んでいた。小論の冒頭に紹介した拙書の表紙をかざる惹句は、担当編集者が書いてくれたものだが、「読まなければならない本、というものがあつた」という卓抜なものであるが、まさに、これこそが教養主義の時代を表わしたものである。戦前が特権的教養主義の時代だったとすれば、戦後は大衆的教養主義の時代になったのだともいえる。

○読書する大学生

こうしたキャンパス文化のせいで、このころまでの読書は社会人よりもはるかに大学生が多かった。たとえば、'64年でみると、大学生を中心とした学生の図書購入が32%も占めていた。このときの大学生は、潜在読書人口（15～65歳）の1・5%前後だったことを思えば、大学生こそが本を購入する人であり、読書する人だったのである。

当時、政治学者丸山眞男は、日本社会における知的好奇心の特徴についてつぎのように書いている。「10代後半から20代後半という若い世代に圧倒的に集中している。ですからそういう読者の大部分は大学卒業生も含めて、卒業とともに普遍的な教養からも急速に『卒業』してしまう」（『近代日本の知識人』）、と。

○教養主義の衰退

こうしたキャンパス文化模様が変化したのは全共闘運動のあとからだった。大学生の読書量が減っただけではない。マンガやアニメのほうに関心が移った。

全国大学生生活協同組合連合会のデータによると、大学生の1日当たり読書時間は、'71年には108分だったのが、'77年には61分、'97年には31分にまで落ち込んだ。

書籍購入に占める大学生の割合も'64年の32%から、'97年には8%と4分の1に減っている。'64年から'97年の間に大学生の人口に占める割合は約2倍に増えたのだから、書籍購入における大学生の割合は30年ほどの間に8分の1になってしまったということである。

このようにいうと、大学生の割合が格段に増えているのだから、当然であるとおもうかもしれない。たしかにそうではあるが、京都大学のような同じ大学を選んで読書傾向を時系列で比較しても、思想、教養書などの硬い本の読書は、'70年ごろから大幅に減っているのである。

○教養主義の欠点

こうした教養主義の衰退ぶりをみると、70年代以降現在に至る大学生を嘆かわしく思うかもしれない。読書もしないし、教養もないと。

しかし、'70年ころまで存続した大学生を中心とした教養主義も体験者としてよくよく反省してみれば、それほど誉められたものでもないようだ。

たしかに、読書をすることによる真善美の追求や人格の向上、社会の改良という気持ちがあったけれど、岩波文庫のあれを読んだか、お前は読んでないのかとか、はては何冊読んだかと知識の量を競い合うようなところもかなりあった。じっくりと文化を「味わう」というのではなく、とにもかくにも知識を「所有」という志向が勝っていなかっただろうかと、自分を含めて反省する。

したがって教養主義から生まれるのは、自由闊達な教養人とはずいぶんちがった人間像で、教養「主義者」としかいいようがないものだった。

溜め込み系と嗜み系

先ほど触れたように、教養主義は文化を味わうというより、所有していこうとする志向が強い。したがって、文化を深いところで味わうことのできる人が教養人であり、知識量を目指す人が教養主義者であることになる。教養人は文化を味わう人であり、教養主義者は文化を溜め込む人である。

教養人はたしなみ系で、教養主義者は溜め込み系やひけらかし系と言い換えてもよいだろう。

こうみえてくると、これからの教養や学びを歴史に探るとしたら、教養主義の原型となった『三太郎の日記』や「善の研究」を読む旧制高校生（男子）ではないようだ。むしろ同時代の高等女学校（戦前の女子の中等教育機関）生の教養や学びの形に一つの範があるように思える。

彼女達にとって、高等女学校の学歴は必ずしも立身出世につながるわけではなかった。卒業後、職業婦人になったり、さらに上級学校に進学したりする道は狭かった。多くの場合は、結婚による主婦の道がまっていたにすぎない。

そうであればこそ、彼女たちの教養や学びは立身出世や大衆を差異化することと切斷された。無償の知への愛だけが誘因だった。しかも、彼女たちの教養は、外国小説の読書やモダンでハイカラな近代的なスポーツ、西欧音楽の観賞だけでなく、伝統的な和歌、習字、手芸、琴、生け花、茶の湯にまでわたっていた。

大正時代半ば以後は、高等女学校卒業生が増え、「立身出世亭主と教養女房」という言葉が流行った。高等教育卒業の男性は社会にでると、教養主義をかなぐり捨て、講談や浪花節だけの愛好家となり、俗物と化していくのに対し、女房のほうは、吉屋信子の小説を読んだり、観劇や音楽などの世界を愛し、そこに楽しみを見出していたからである。

彼女達の教養は、古典の読書を中心とした旧制高校的「教養」主義とちがっているのは、読書中心主義ではなかったことである。そもそもどれだけ知識量が増えたというような主義でもなかったことである。旧制高等学校的な硬い漢字の教養に対比していえば、軟らかな平仮名の「きょうよう」とでもいうべきものだった。

対人関係のなかで

これからの社会が目指すべきは、頭だけの漢字の教養主義ではなく、身体化された振る舞いまでに至るこうした「きょうよう」（教養）ではなかろうか。溜め込み系ではない、たしなみ系の教養だと思う。

教養については、ひけらかす教養（「あの人は、すぐ教養をひけらかす」）とじゃまをする教養（「教養がじゃまをしてあこぎなことができない」）とがいわれるが、溜め込み系はひけらかす教養に、たしなみ系は、じゃまをする教養に対応している。

そして、このような、たしなみ系の教養は、単にすぐれた本や芸術作品と個人的に対面して得られるというものではない。教師や先輩、仲間などの対人関係によって厚みの増したことになることを忘れてはならない。よい先生や友人との人間関係のなかで会話やさらには身振りによっても培われていくものである。

平成 15 年度の文化功労者に選ばれた建築家安藤忠雄さんは、こういつている。「生活のなかで心から感動したり、本当に考えたりする力を日本人は取り戻さないとあかん」。安藤さんのいう「生活のなかで」は、人と人の間のなかでの行為をつうじて得られる教養と学びの重要性を示しているとおもわれる。

教養とは

アメリカ史家ホーフスタッター(Hofstadter,R)は、名著『アメリカの反知性主義』(Anti-Intellectualism in American Life,1963)の中で、「知能」(intelligence)と「知性」(intellect)とを区別している。「知性」とは直接的経験から身を離す能力であり、当面の実用的な仕事を超越した包括的な視野のことであるとし、「知能」と「知性」との違いにつ

いてつぎのようにいっている。

Intelligence is an excellence of mind that is employed within a fairly narrow, immediate, and predictable range; it is a manipulative, adjustive, unfailingly practical quality

Intellect ,on the other hand, is the critical, creative, and contemplative side of mind. Whereas intelligence seeks to grasp, manipulate, re-order, adjust ,intellect examines,, ponders, wonders, theorizes ,criticizes, imagines.. Intelligence will seize the immediate meaning in a situation and evaluate it.Intellect evaluates evaluations and looks for the meaning of situations as a whole.

(知能はかなり狭い、直接の、予測可能な範囲に適用される頭脳の優秀さを指す。ものごとを処理し、適応するなど、きわめて実質的な特質である。・・・一方、知性は頭脳の批判的、創造的、思索的側面といえる。知能がものごとを把握し、処理し、再秩序化し、適応するのに対し、知性は吟味し、熟考し、疑い、理論化し、批判し、想像する。知能はひとつの状況のなかで直接的な意味を把握し、評価する。知性は評価を評価し、さまざまな状況の意味を包括したかたちで探し求める。田村哲夫訳)

このような分類にしたがえば、知能 (intelligence) は「専門知識」に、「知性」(intellect) は教養 (culture) に近くなる。専門知は「知識」(knowledge)に、教養知は「知恵」(wisdom)になる。

教養はなぜ必要か

社会学者井上俊は文化の作用として「適応」「超越」「自省」の三つをあげている。教養の社会的意味を考えるうえでこの三つの作用は重要であるから、井上の指摘によってみよう。

「適応」つまり人間の環境への適合を助け、日常生活の欲求充足をはかることは文化の基本的な働きである。実用性がこれにあたる。しかし、効率や打算、妥協などの実用性を越えるはたらきも文化の中に含まれている。「超越」である。実用主義に対して理想主義といってもよい。しかし、文化にはさらにもうひとつの機能もある。「自省」である。みずからの妥当性や正統性を疑う作用である。自問や自省の働きである。

もともと文化の自省機能は、超越機能から派生したものであるが、しだいに超越要因から自立し、独自の意味をもつようになる。というのは「自省的要因から発せられる懐疑の矢は、一方で現実適応的要因の働きに向けられて、超越的要因からの理想主義的な現実批判とはちがった形の批判を生みだすだけでなく、他方では、超越的要因そのものの働きにも向けられうるからである」(「日本文化の一〇〇年」『悪夢の選択』)。逆に自省的懐疑主義も超越的理想主義や適応の実用主義から批判と相対化に晒される。文化はこの三つの作用の拮抗とダイナミズムからなっている。

そして井上は、一九七〇年代以降の状況を文化の適応機能が肥大し、超越、自省の作用の衰えによる一元化が急速に進行し、三つの作用の拮抗と補完の動的な関係が喪失しているとしている。それは、文化における活力や創造力の喪失につながるものである。井上のいう文化の三つの作用は、文化の学習である教養についてもいえるだろう。教養は個人に

とってのみならず、社会にとっても必要である所以がここにある。

参考文献

- 竹内 洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003
苧部 直『移りゆく「教養」』NTT出版、2007